

岐阜キリシタン小史(63) 等安と如安—高山右近をめぐる二人のキリシタン—

村山等安と内藤如安は、戦国末期から安土桃山、そして江戸初期へと至る激動の時代に、それぞれ異なる道を歩みながらも、高山右近と深く関わったキリシタン武将である。彼らが生きた時代、キリスト教を信じるという選択は、単なる宗教的関心ではなく、政治的立場や家の存続にまで影響を及ぼす重大な決断であった。信仰を選ぶことは、しばしば人生の方向を決める行為であり、家族や一族の運命にも関わることでもある。

村山等安の生涯と長崎キリシタン社会

村山等安は1550年代(天文末～弘治頃)に尾張国で生まれたとされるが、その出身地には清州(現・愛知県清須市)を中心とする複数の説がある。若い頃は商人として活動し、南蛮貿易の情報が早く入る尾張で異国文化に触れる中、イエズス会宣教師と接触して受洗した。洗礼名アントン(Antão)を受けたのもこの頃である。また、「等安」という名はアントンを和風に転じたもので、豊臣秀吉が与えたとする伝承がある。確証は乏しいが、秀吉の信任を得ていたことを示す象徴として語られてきた。

天正年間(1573-1592)に等安は長崎へ移り、朱印船貿易に携わりながら財を築いた。呂宋壺の取引で成功し、語学力と実務能力を備えた人物として知られるようになった。こうした能力が評価され、1580年代後半には高山右近の家臣団に加わった。当時の右近は摂津・高槻を領し、キリスト教的価値観を領政に反映させようとしていた。右近が思い描く信仰に基づく領国経営を実現するためには、理念だけではなく、現実の行政を担う人物が必要であり、等安はその期待に応える存在であった。

1592(文禄元年)、等安は豊臣秀吉に謁見し、長崎代官となることを許される。1604(慶長9)年には徳川家康にも追認され、長崎外町を支配し、朱印船貿易を通じて影響力を強めた。1616(元和2)年には台湾征討のため、次男・秋安を司令官とする船団を派遣したが、暴風により失敗した。

等安の家族はキリシタンであり、妻も信仰を持ち、子どもたちも洗礼を受けていた。子息の一人は司祭フランシスコ等安となり、他の子息たちもキリシタンであった。長崎での等安の生活は、家族の信仰と密接に結びついていた。

1612(慶長17)年、岡本大八事件が起こる。岡本大八は徳川家の旗本で、老中・本田正純の側近として権勢をふるっていた人物である。大八は、キリシタン大名・有馬晴信に対し「本田正純の力添えで所領を与えられる」と偽って金銭を受け取り、さらにその事実を幕府に訴えて晴信を失脚させようとした。事件は収賄と虚偽訴訟の罪として大八が処刑される結果となったが、キリシタン大名が巻き込まれたことで、幕府の禁教姿勢を一気に強める契機となった。等安はキリシタン代官であったため、この事件以後、幕府の厳しい監視下に置かれることになった。

1614(慶長19)年、徳川幕府は全国的な禁教令を発布し、高山右近は国外追放を命じられた。右近一家



『長崎代官村山等安その愛と受難』
小島幸枝(聖母の騎士社)
村山等安のことは、この本に詳しい

が金沢から長崎へ移送された際、等安は長崎代官として受け入れに深く関わり、滞在中の生活の手配や出航準備を支えた。右近にとって長崎での短い滞在は、国外追放に向けた最後の準備期間であり、等安はその日々を陰で支えた。

1615(元和元年)、大坂夏の陣で等安が豊臣方に武器を供給したという嫌疑がかけられた。三男フランシスコ等安を豊臣方へ送ったという証言もあり、政治的思惑と個人的怨恨が重なり、等安は孤立していった。

1618(元和4)年、末次平蔵の訴えを受けた幕府は等安を江戸に召喚し、取り調べを行った。平蔵は父の代から続く巨大商家の当主で、朱印船貿易を担う長崎有数の豪商であった。等安はその平蔵と、貿易利権や宗教的立場、政治的思惑が重なり合う中で深い対立関係にあった。その結果、1619(元和5)年10月、等安は江戸で斬首され、長崎に残された一族も処刑され、村山家は断絶した。



村山等安は、日本で最初にカステラを作り、豊臣秀吉に献上した人物と言われている。

内藤如安の生涯と信仰の歩み

内藤如安は1550(天文19)年頃、摂津に生まれた。実名は忠俊、父は三好氏重臣・松永長頼(松永久秀の弟)で、丹波八木城を拠点とする武家の出であった。如安は武家の子として育ち、若くしてキリスト教と出会った。1565(永禄8)年の春、彼は宣教師ルイス・フロイス、またはガスパル・ヴィレラによってキリスト教に入信し、洗礼名ジョアンを受けたと伝えられる。

当時、摂津・高槻周辺ではイエズス会宣教師の活動が広がり、高山右近の家臣団や周辺のキリシタン武士との交流も生まれていた。右近の信仰は如安にとって「信仰とは何か」を具体的に示す生きた証しであり、その姿勢は如安に深い影響を与えた。

如安はまた、茶の湯にも通じた人物として知られ、茶人としての名もあった。右近自身も茶の湯を深く愛し、信仰と結びつけた精神修養の場として重んじていたため、二人は茶の席を通じても親しく交流した。金沢期には、右近の茶会に如安がしばしば同席したと伝えられ、茶の湯は両者の精神的な結びつきを深める場となった。

如安の実妹・内藤ジュリアも、内藤一族の信仰を象徴する存在であった。ジュリアは大名夫人たちへの布教に力を注ぎ、とくに宇喜多秀家の妻・豪姫(前田利家息女、秀吉の養女となる。秀吉は豪姫を溺愛した)を改宗させたことで知られる。1606(慶長11)年には、京都に日本で初めての女子修道会であるベアタス会を設立し、女性たちが祈りと奉仕の生活を送る場を開いた。ジュリアの活動は、如安や右近の信仰と響き合いながら、女性の側からキリシタン社会を支える重要な働きであった。



ジョアン内藤飛騨守忠俊顕彰碑
(京都府南丹市八木町)



十字架の patibulum(横木)には、
Misericordias domini in aeternum cantabo
と書かれてある。
「主の慈しみを、私は永遠に歌い続けよう」

1578(天正 6)年、荒木村重が織田信長に反旗を翻した際、如安は村重に従った。その後、小西行長に仕え、文禄の役では明との和睦交渉の使者として北京に赴くなど、国際的な場でも活動した。

関ヶ原後、如安は加賀前田家に迎えられ、ここで再び右近一家と深く交わることになる。金沢での生活は、右近と如安の家族が互いに行き来し、祈りを共にする日々であった。

1614(慶長 19)年、徳川家康による禁教令が発せられると、内藤如安は妻子・孫・親族とともに、高山右近と同じ船でマニラへ向かった。ジュリアもまた、この時代を生き残った一人のキリシタンとして、右近や如安と同じく信仰に基づく歩みを続けていた。

1615(元和元)年、マニラ到着後まもなく右近は病没し、如安はその最期を看取った。亡き右近の志を受け継ぐかのように、如安はマニラ近郊のディラオ(Dilao)に日本人町を築き、日本人キリシタン共同体の指導者として歩み始める。彼は居住地の整備や生活基盤の確立に尽力し、亡命者たちが異郷の地で信仰を守りつつ生きていくための拠点を整えた。

その後も如安はマニラにあって祈りを中心とする生活を続け、日本人信徒たちを精神的に支えた。そして1626(寛永 3)年、異国の地でその生涯を閉じた。信仰を選び、地位と故国を離れたその歩みは、亡命という試練の中にあっても揺らぐことのない信仰の証しであった。



京都・南丹市の顕彰碑と同じ形状の碑がフィリピンマニラにもある。聖ヴィンセント・デ・ポール・パリスヨ教会(マニラ・カトリック教会)

等安と如安——右近をめぐる二人の信仰

村山等安と内藤如安は、同じキリスト教を信じながら、まったく異なる道を歩んだ。等安は右近の理想を現実に落とし込む実務家として、如安は右近と祈りと茶を共にし、さらに実妹ジュリアは女性たちの側から信仰共同体を支える存在として、それぞれ右近と深く結びついていた。等安は政治の渦に巻き込まれ、最終的には処刑されるという厳しい結末を迎えた。一方、如安は家族とともに国外追放ののちも祈りの生活を続け、異国で生涯を閉じた。

二人の人生は直接交わることは少なかったが、右近という人物を真ん中に据えることで、三者の歩みを比較・参照することができる。村山等安は長崎の都市社会と貿易の現場で信仰を保ち、内藤如安は右近とともに国外へ退去する道を選んだ。それぞれの歩みをたどることで、戦国期のキリシタンが置かれた状況や、その中で選び取った生き方が見えてくる。



全国各地にある高山右近像(ここに掲げたものは一部。)

左からも高槻城跡公園(大阪府高槻市)、高岡古城公園(富山県高岡市)、カトリック小豆島教会(香川県土庄町)、高山右近記念公園(石川県志賀町)、いちばん右は 1942 年フィリピンのマニラで作られた像。日本にある像がどれもよく似ているのは、フィリピンのものがオリジナルになっているからである。